

草庵仏教

第166号
(発行日)
2004年4月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
メール：kimyou4@yahoo.co.jp
http://www.eonet.ne.jp/~souan

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月22日午後2時
.....
- 〈念仏座談会〉
第1土曜日午後3時
第3土曜日午後3時
* 8月の〈同朋の会〉及び
第3土曜日の念仏会は休み。

暴力と平和

E 「二〇〇一年ニューヨークの9・11の同時テロ事件以来、アメリカはテロの報復と撲滅のために、テロ集団とそれを支援する国家を武力でもって制圧する行動に出ました。最初はアフガンスタンで、それが一段落すると、今度は、大量破壊兵器をもっている上にテロ支援国家の疑いがあるという事でイラクを短期間に制圧しました。ところが、その後もテロが頻繁に続いています」

D 「そうですね。目には目を歯には歯を」といわれるようにアメリカのいう正義は、テロという〈殺〉にたいして〈殺〉で向かうという姿勢ですね。それが多数のアメリカ国民の支持を受けて報復が行われましたが、小さな殺に対して巨大な殺が行われてきたように思われます。一発殴られたら、お返しに百発殴っても良いというような論理です。テロも恐ろしいがそれに報復する論理が正当化されるのも恐ろしいですね」

E 「そうですね。こうしたアメリカの軍力による解決は他の国にも影響を与え、紛争処理にたいして軍力によって押さえ

るのが得策であり一番効果があるという考えに傾いてきています」

D 「イスラエルもとうとうパレスチナの過激派ハマスの指導者ヤシン師を殺害し、幹部全員の抹殺をねらっています」

E 「世界のいくつかの紛争地域で平和的な解決よりも武力による相手の殲滅という方向へグッと傾いていくのではないかと懸念されます」

D 「こうなると憎しみは憎しみを生み、暴力は暴力を生み、報復を繰り返して暴力の連鎖は止まりません」

E 「暴力による解決は即効的ですが、あとに尾を引いて、それがまた火種となって、しばらくするとまた繰り返すというケースが多いですね」

*
D 「そうなんです。もしアメリカが軍力で首尾良く制圧して状況が安定したとします。そうすると各国や各集団が紛争の解決をするのに一層軍力頼みとなり、利害が衝突するとすぐ武力にものをいわせることにもなりかねません」

E 「そうなると軍力の優位をできるだけ保ちたいと思い、さ

らに軍力の増強をはかるようになりませんか」

D 「ええ。忍耐強く平和的な解決を図るといやり方は後退し、できるだけ平和的に解決しようという国連の権威は弱くなり、軍力と経済力がもつとも強大な国、それは今日ではアメリカですが、アメリカの意向が世界を動かすようになってきます」

E 「今年になって日本が自衛隊をイラクに派遣しました。それは人道支援という表向きの大義の裏にアメリカに従属することによって日本の国益をまず第一に守ろうとする意図がみえみえです」

D 「小さい頃、近所の子供たち同士でケンカになると、話し合っ解決することよりも、腕力の強い者が相手を殴って言うことをきかせることが多かったですね。それで力の弱い者は、正しい方に味方をするよりも腕力の強い者に同調し、それによって自分を守ろうとしたものです。ですから子供同士のケンカでも腕力の強い者が幅をきかせていました」

E 「正義の論理よりも力の論理が幅をきかせるのが現実の姿ですね」

D 「アメリカのような巨大な軍力に対抗するにはさらに巨大な軍力をもつことが必要になります。そういう軍力を同じように持つことは難しいです。だから、真正面から戦うのでは

なくてテロによって相手に心理的に打撃を与えて、政治を動かそうとしたり、自分たちの都合の良いような政策に変更させようとするのでしよう。巨大な軍力の網の目をかいくぐって敵に打撃を与えるものとしてテロが有効と考えられていますから、これからもテロは続くと思えます」

E 「そうなると社会は目に見えないテロの不安をかかえ続けることになりますね」

D 「時間はかかっても平和をもちたらずには平和的な手段でなくては真の解決にはならず、暴力的で即効的な解決は暴力の連鎖をうみます」

*
E 「平和的な解決とはどのようなものでしょうか」

D 「暴力をたとえ最初に受けても暴力で返すのではなくて、忍辱し、非暴力で抵抗する、それによって相手の間違いを自覚させていくという、これはぜひいぶん忍耐と自己抑制がいりますが、一番願わしい対処の仕方だと思います。インドのガンジーがインド独立運動で民衆を指導したのがこうした非暴力の方法です。これはたとえ敵であろうと人間に対する信頼があつて初めて可能ですね。敵対する勢力であろうと、相手方の人間の尊厳と良心を信頼することがあつてこそできることですね」

E 「ということでは、暴力で相手

をたたきつぶすというのには相手方の人間に対して不信があるということですね」

D「そうです、相手に対する強い不信感が基本にあります。」

「あいつらと話し合っても分かる相手ではない」とか、「話し合う価値のないやつらだ」とか「抹殺するしかない奴ら」という人間を蔑視し人間の良心を信じないという見方が底にあると思います」

*

E「では暴力は何時の場合でも使つてはいけないのでしょうか」

D「そこが大変難しいところですね。必要悪とかどうしても武器を取って戦わねばならない時があると思います。いわばやむを得ぬ場合です。たとえば他国が不正に侵略して来て大量に殺戮を始め、話し合ってもダメであり、話し合う機会も時間もない時は、家族を守るためにも戦わねばならない場合があると思います。歴史的に見れば、ナチスドイツの横暴によつて日々に多数の犠牲者が出る場合、抵抗するために武器を取らねばならない場合があると思います」

E「とくに誤った信念や極めて偏狭な主義や狂信的な宗教心情に動かされて虐殺を行う集団は非常に恐ろしいものですね」

D「ええそういう独善的かつ狂信的な集団を簡単に説得することは難しいです。そういう集団がジェノサイド(虐殺)を行う

時はそれを止めるために武力を用いることもやむを得ない場合が考えられます。たとえばかつて



毘盧遮那如来<唐招提寺>
(C)SHOGAKUKAN INC.

てのカンボジアのポルポトのよ

うな集団に対しては」

E「それらは今度のニューヨークのテロとは性格が違うのでし

ょうか」

D「違うと思います。こんどのテロは基本的にはアメリカに対する、強烈であつても一種の示威行動だと思います。ところがナチスの場合はたとえばユダヤ民族の抹殺であり、ポルポトの場合は知識階級の抹殺で、どちらも非常に偏つた思想から来

ます」

E「狂信的な思想からくる殺戮は自分たちのやっていることは善いことだと思つているから止めようがないのですね」

D「そう思います。もちろんイスラム原理主義にもそういう傾向があります。規模が小さいし、しかもテロの目的は相手を殺害することそのことよりも、テロによる政治的効果をねらつたもの

のだと思います。だからその行為は悪であつても大規模にはならないし、平和的な方法で善処

することによつて減らすこともできると思っています」

E「そうすると、できるだけ平和的解決を尽くしていくことが大事ですね」

D「そうですね。ところが今度のイラク戦争はフセイン政権の罪悪性はあるにしても、軍事力で押さえ込まねばならないほどのものとは思えません。このところのフセイン政権による人民

の生命の犠牲は規模としては小さかつたと思います。むしろ民衆へのさまざまな自由の抑圧こそ問題だつたと思います」

E「けれどもフセイン政権の独裁政治は疑問ですね」

D「ええ独裁政治が良くないことはいままでもありません。しかし、独裁政治が行われているからといって、それを外国の勢力でつぶしてもいいなら、イラク以外にもこうした国は何カ国

もありまして、独裁といわなくとも民主主義の未熟な国はいくつもあります。現に中国がそう

でしょう。そういう国を潰すと

なると、そのつど戦争になりま

す。また、たとえ民主主義勢力が勝つたとしても、それによる

多くの一般市民の人命が失われるのですから、その人たちの犠牲はどうにも償いようがありませんし、それによつて国がすぐ

に復興して前より良くなるとは必ずしもいえないと思います」

E「要するに武力でもつて問題

を解決する手段は最後の手段であつて、非暴力による解決が本筋であり、それは自制と忍耐と人間の尊重がなければならない

ですね。では平和的な善処にはどのようなものがありますか」

D「平和的であり人間の自由と尊厳を保障する民主主義の考えをその国の人々に普及すること、

いわば教育が大事だと思つています。悪い政治体制でもそれを底辺で支えているのはやはり国民です。

ヨーロッパの独裁的な社会主義国家がほぼ平和的に変革されたのは民衆への民主主義の考えが浸透していったからだと思つ

ます。こうした教育の他には国連の働きかけや時によると経済的な制裁なども必要になりましたよ

う」

*

D「平和にとつて国民の考え・思想・理解などが基礎的に大事

ですね。それと、一番恐ろしいのは思想や宗教の偏りによつて、(殺し)が正当視されてしま

うこと。そうすると止めることが非常に難しくなりますね。なぜなら自分たちは善をおこなつ

ていると思ひこんでいますから」

E「そうですね」

D「だから思想や宗教の問題には直接見えないけれども、戦争と平和の基礎の問題です。

これが乱れたりゆがんだりさらには狂信的になると收拾がつかなくなり

ます」

E「そういう意味では平和で非暴力な正しい思想や宗教が人の心に届き、それによつてゆがんだ思想や狂信がなくなっていく

ことが大事ですね」

D「そうですね。第二次世界大戦でも日本の軍国主義や皇国史観や国家神道などというゆがんだ思想が戦争の論理を正当化し、戦争続行を支えたといわれ

ています」

E「本心に正しい平和な思想や宗教に育てられることが大事ですね」

D「そう思います。それを私は仏教に期待して

ます。私の偏見といわれるかも知れませんが、仏教は最も平和的な宗教であり思想だと思つています。仏教の世界観や人間観が世界に弘まることは世界の悲惨な殺戮を止めていく土壌作りになると思つています」

(了)

《感銘の言葉》

私は人類を救おうとしても人類を救い得ない。私はただ(私)を真に救う時人類への貢献をなし得る。

澤瀉久敬 (フランス哲学者)

歎異鈔 第十五章第二講

来生の開覚は他力浄土の宗旨、信心決定の道なるがゆえなり。これまた易行下根のつとめ、不簡善悪の法なり。(歎異鈔第十五章より)

現代語訳(次の世でさとりを開くというのが他力浄土門の教えであり、信心が定まったときに間違いなく与えられる本願のはたらきなのです。これは、能力の劣った人に開かれた易行の道であり、善人も悪人もわけへだてなく救われていく教えです)

来生の開覚とは、来世に浄土に生まれて覺りを開いて佛になるということです。浄土は涅槃界といわれ、その涅槃界について聖人は「涅槃界というは、無明のまどいをひるがえして、無上涅槃のさとりをひらくなり。界は、さかいという。さとりをひらくさかいなり」

(唯信鈔文意)

と教示されています。浄土は無上の覺りを完成する境界です。ですから浄土に生まれることはこの上ない覺りを完成することです。すなわち佛になることです。それで、真宗では来世において浄土に生まれて佛になるのであって、この世で佛になるのではないと教えられ、真言宗や天台宗などの聖道の諸教との違いを明確にしているのです。

そして涅槃界である浄土に生まれることが決定するのは現生(この世)におい

てであり、それは本願を信じる信心によってであることを、ここでは信心決定の道とお示し下さっています。私たちがこの世で信心をいたさなければ、正定聚といつてまさしく浄土に生まれることが決定した人たちの仲間に入るのであり、そしてこの世の生を終えて浄土に生まれてさとりを開いて佛になる、それが他力浄土の宗旨であるといわれているのです。

*

来生の開覚ということは非常に有難いことです。下根の私が本願力に全面的に受けとられ本願力に引きつけられて浄土に生まれさせていただくゆえ、この世では下根のこの身のままで生きさせていただけるのであります。上根下根を選ばず、善悪を選ばず(不簡)、一切衆生を平等に導き、受け取りたもう本願の攝取なればこそ、私のような自分を変革する力のない者も生きていけるのであります。この道においてこそ落ち着いて生涯をつくりたいけるのであります。この身を難しい修行によって浄化し、この世で佛に成らねばならないのなら、佛にはなれそうもない私は絶望してしまうほかありません。

*

現実の我が身における罪の深いことを感じれば感じるほど、この世で佛になるなどということは私にとってはあまりにも我が身の現実からかけ離れた、単なる観念でしかないように思われます。

罪業の身にとつては、この身を終え、人の身としての生涯を終えて、佛に成らしていただけることが有難いのであります。「お前は信心をいただいたのだから、もう佛も同然だ」などとたとえいわれても嬉しい気持ちはしない、落ち着かない

のです。

世の知識人の中には、「娑婆即寂光土で、自覚すればこの世はこのままが浄土である」とか、「衆生本来佛なりで、人間は本来佛である」とかいわれます。それも原理的にはわかりませんが、凡夫の私においては実感が乏しく、そう言われても有難みは乏しいのです。それよりもむしろ、「浄土に生まれて佛にさせていただくのである」といわれ、この世を超えて浄土があり、その浄土の光に濁悪の世は照らされ、罪業の身も浄土の光に攝取されるのの仰せが大変有難いです。

どういわれても我が身は罪業の身であり、この世はまことに濁世と感じざるをえません。罪の身が滅ぶことはそういう意味では有難いことであり、「死ななきや佛になれない」といわれる通りだと思えます。「死後に浄土に生まれる」と説かれるのは、人間の身が罪業深い身だからではないでしょうか。その罪業感から「死んで浄土に生まれさせていただく」という教説がうなずかれてくるのです。罪業感を離れるから「死んで生まれるお浄土」の話に実感がわかないのではないのでしょうか。

*

ではなぜ人間は罪業の身なのでしょう。それについては、人間の身体はどうなっているかをよく見れば少しはうかがうことができると思います。人間の身体は基本的に動物の身体と同じです。動物の身体はかならず「食べないと生きられない」身体であります。それゆえ動物の生態を見ますと、動物は一日中何をしているかという(餌の獲得)であります。そしてそのために他の生き物を殺して食べています。いわば弱肉強食です。その

姿は人間も同じです。食わんがために他のいのちを奪っています。そして他の動物と違って人間は未来の備えのために(蓄える)ことによって生存のための安全を確保しようとしています。それは家族のためでもあります。

*

それゆえ食わんがため、家族を養うために人間は稼がねばなりません。金儲けをしなければなりません。その金儲け、利害損得のために、人間はどういう生き様をしているのでしょうか。

この世の人間のあさましさ、むさぼり、あらそい、へつらい、ごまかし、ねたみ、うらぎりなど、多くの罪がお金にまつわることからきているのではないのでしょうか。いわば「食ういていく」ために実に多くの悪がなされていると思えます。

またこの身体はオスとメスの体になっています。いわゆる性愛の体です。この体ゆえに子孫を残せるのですが、またよれゆえにどれほど人間は浅ましいことをしてきたか、男女の愛憎を燃やしてきたかはかり知れません。

このように動物の身体の本に欲望があります。ただ足るを知っている動物と違って人間の身においては欲望は貪欲になっています。すなわち過剰な欲求になっています。それを聖人は「貪欲といふに二つあり、一つには姪貪、二つには財貪なり」とお示し下さっています。

*

このような罪深い身においてはこの世での開覚(成仏)でなくて「来生の開覚」こそ相応しいのではないのでしょうか。

(了)